



ブライアン・ジーチ・ローレンツ
「滝2」

東西の美が呼応

空間と闘う画家

画家は空間と格闘する。何のために？ いやむしろ人間が自分の手で風景を描けると分かったときから、つまりその能力に気づいたときから、この業のような表現に逆に取りつかれたのではなからうか。そして実際人間はこの困難な闘いに時に成功するのである。神戸の光に引かれ、ここで念願の個展を開いたブライアン・ジーチ・ローレンツの力強い作品「滝2」の場合がそうである。

ジーチ展

美術

大きな刷毛ハシのようなもので漆黒のアクリル絵の具がザツと塗り下ろされている。その黒々とした落下の上に再び大胆に強い白。画家が制作に費やす行為はこの、たった二種類。だがそのつかの間の動きで現れるこの空間の壮大さ。

強靱な岩盤、ごうごうと崩れる水…。
もはや画家は滝を「描いた」のではない。彼は滝に「なった」のだ。画面にズバツと切り込んだとき、画家は恐ろしく心で沈黙の叫びをあげたろうが、私たちはそれを落水のとどろきと聴くのである。この「転身の奇跡を見据えれば、彼がなぜ日本に身を置いて制作するか、なぜ東山魁夷を敬愛するかが理解できる。

生地リパプール(イギリス)の美術館でターナーの絵に圧倒された四歳の体験がこの画家の人生を決定した。空気の運動を絵にしたあの大天才は多分ヨーロッパの美術史上最も深く空間に「なった」画家である。そして東山魁夷は近代日本画の歴史の中で「空間」そのものと最も深く格闘した画家なのだ(道だけを描いた絵「道」!)。この「滝2」は東西の美の呼応の上に生まれている。

B・Z・ローレンツ展は十五日までギャラリー北野坂
078・2222・5517

(山本忠勝)